

山口県埋蔵文化財調査報告 第178集

せんだう
船頭遺跡Ⅱ

—平成6年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

1995

財団法人 山口県教育財団
山口県教育委員会

序

近年、農業基盤整備事業等の進展に伴い、県下各地の埋蔵文化財が掘りおこされる機会が増加してまいりました。

私たちの郷土山口を築いてきた先人たちの長い営みを今に伝える数多くの歴史的遺産を、こうした工事から保護し、併せて、開発と文化財保存との調和のとれた県土づくりを旨として、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会では、県営ほ場整備事業施行予定地区に係る埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。

平成6年度は、豊浦町大字吉永に所在する船頭遺跡の発掘調査を行い、当時の人々の生活文化の実態を知る上で貴重な手がかりを得ることができました。

この発掘調査の成果をまとめた本書が、学術研究や教育の資料に利用されることにより、広くふるさとづくりの基礎資料として活用されることを願うものであります。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々、及び関係各位に対して、深甚なる謝意を表します。

平成7年3月

財団法人山口県教育財団 理事長 高浜 哲
山口県教育委員会 教育長 高浜 哲

例 言

1. 本書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が平成6年度に実施した船頭遺跡（山口県豊浦郡豊浦町大字吉永字船頭）の発掘調査概要報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団

山口県教育委員会（山口県埋蔵文化財センター）

調査担当 財団法人山口県教育財団事務局指導主事 山本義信

安村 優

山口県埋蔵文化財センター文化財専門員 谷口哲一

3. 調査にあたっては、山口県農林部耕地課、山口県下関土地改良事務所、豊浦町農林課、豊浦町教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

4. 本書の第1図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「川棚温泉」を使用した。第2図は下関土地改良事務所提供のものである。

5. 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）で示し、標高は海拔標高である。

6. 出土遺物のうち磁器については山口県立美術館学芸専門監 榎本徹氏の指導助言を得た。石製品の石質鑑定は、山口県立山口博物館専門研究員 亀谷敦氏に依頼した。なお石質鑑定は表面観察によるものである。

7. 本書に使用した土色の色調の表記は Munsell 方式による。

農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帳」

8. 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

9. 土器実測図について、断面黒塗は須恵器、網掛けは輸入陶磁器、白塗は弥生土器・土師器・土師質土器・瓦質土器・施釉陶器を表す。

10. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

SB：住居跡、建物跡 SK：土坑 SP：柱穴 SD：溝・溝状遺構 ST：墳墓

11. 本書の作成・執筆は、山本・安村・谷口が分担作成し、谷口が編集した。

目 次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	3
III	遺 構	9
	(1) 竪穴住居跡	
	(2) 掘立柱建物跡	
	(3) 溝・溝状遺構	
	(4) 墓	
	(5) 土坑	
IV	遺 物	20
V	まとめ	30

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………	1	第15図	SB 出土遺物実測図(1)……………	20
第2図	調査区設定図……………	4	第16図	SB35出土遺物実測図(1)……………	21
第3図	第Ⅳ地区遺構配置図……………	5・6	第17図	SB35出土遺物実測図(2)……………	22
第4図	第Ⅴ地区遺構配置図……………	7・8	第18図	SD24出土遺物実測図(1)……………	23
第5図	SB27・34・32実測図……………	10	第19図	SD24出土遺物実測図(2)……………	24
第6図	SB05・28・29・35実測図……………	11	第20図	SD24出土遺物実測図(3)……………	25
第7図	SB67・69・59実測図……………	13	第21図	SD24出土遺物実測図(4)……………	26
第8図	SB37実測図……………	14	第22図	SP・SD 出土遺物実測図……………	27
第9図	SB52・53実測図……………	15	第23図	輪羽口実測図……………	27
第10図	SB54・47実測図……………	16	第24図	ST 出土遺物実測図……………	28
第11図	SD土層断面図……………	16	第25図	出土銭拓影……………	28
第12図	SD24実測図……………	17・18	第26図	包含層出土遺物実測図……………	29
第13図	ST 実測図……………	19	第27図	出土石器実測図……………	29
第14図	SK 実測図……………	20	第28図	船頭遺跡第Ⅰ・Ⅳ地区遺構配置図…	33・34

図版目次

図版1	東より船頭遺跡を望む	空から見た船頭遺跡
図版2	第Ⅳ地区全景	第Ⅴ地区全景
図版3	SB27とその周辺	竪穴住居群
図版4	SB32	SB27
図版5	SB35	
図版6	SB05・34・29・31・28・33	
図版7	第Ⅴ地区を南北に貫くSD24	SD24土器出土状況① ②
図版8	SD24土層断面	SD24土器出土状況③ ④
図版9	SD06に囲まれた掘立柱建物群	SD01に囲まれた掘立柱建物群
図版10	SD01	S B63・41・40・56・55・59・49・69・67
図版11	SP31・32・58	S K25・32・33 ST04
図版12	ST01・03・02	
図版13	SB 出土遺物	S B35出土遺物①
図版14	SB 35出土遺物②	
図版15	SD 24出土遺物①	
図版16	SD 24出土遺物②	
図版17	SD 24出土遺物③	
図版18	SP・SD 出土遺物	
図版19	ST 出土遺物	
図版20	包含層出土遺物	出土石器
図版21	発掘現場風景	

表目次

第1表	竪穴住居跡一覧表……………	9
-----	---------------	---

I 遺跡の位置と環境

豊浦郡豊浦町大字吉永に所在する船頭遺跡は弥生時代・古墳時代・中世を中心とする集落遺跡である。遺跡は吉永川中流域左岸、標高25~36mの洪積台地に位置し、南の豊浦山地から北方に延びる丘陵の縁辺部にあたる。南東には、「長門城」の候補地の一つとして挙げられる鬼ヶ城(619.6m)がそびえ、西方には元の襲来に備えて防塁を築いたと伝えられる室津湾が控える。遺跡から西を望むと、吉永川と黒井川が形作る低地が開け、折り重なるように水田が続く。そこには「八ヶ浜」「白岸」などの地名が見られるが、これらの海に関わる地名は、かつての海進があった時代の海岸線的位置を示すものと考えられる。つまり吉永川下流の地域では、海岸線は内陸に向かって入り込み、湖沼など低湿地帯が広がるといった、現在とは異なる景観を呈していたことがうかがわれる。船頭遺跡の周辺は、海岸に近く、しかも川沿いに広がる低湿地帯を抱える丘陵という人々が生活するに好適な場所であったことは想像に難くない。

船頭遺跡をその地名から考えてみたい。遺跡の北側、吉永川下流域一帯の水田はかつて「吉永庄」と呼ばれる荘園であった。文献によれば、平安末期の文治元年(1185年)、平家追討のため長門に下った源範頼が、源氏勝利を折願して「吉永別府」を一宮に寄進したことが始まりとされる。荘園を管理していたのは荘官である。それを指す名前に、荘長・荘預・荘別当・専当・荘司・公文などがある。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

広島県庄原市の永江庄の例では、小字名として残っている「船頭垣内」「船頭旧」の「船頭」を荘官の一種である「専当」を指すものではないかと推察している。「吉永庄」でも、「まどころ（政所）」という名が田の名として残っていること、遺跡の南西の谷筋には「小（荘）別当」新福寺により築かれたとされる新福寺堤が隣接することなどから、この地における「船頭」の地名もまた、荘官名「専当」に別字が宛てられたものと考えることができる。また江戸時代の「黒井村名寄帳」には「先道」とある。「先道」とは先の道、古道のあったところである。「吉永村地下申絵図」には、黒井の市から川棚に抜ける当時の街道が描かれている。それは大門古墳の山裾を巡っているが、「船頭」の地は通っていない。そこは近世の水田開発により姿を隠してしまっていたのであろう。しかし、その昔は人々が行き来する道があり、「先道」とはそんな古道のあったところを称したものととも考えられる。

では、荘園以前の吉永川一帯はどのような様相であったのか。豊浦低地の歴史を振り返ってみよう。北九州から響灘沿岸にかけての地域は、中国大陸あるいは朝鮮半島の米作りの文化を受け入れる窓口であった。米作りは、稲作可能な低湿地帯の広がる土地に定着していく。目立った平野の少ない響灘沿岸において、川棚川・吉永川・黒井川により形作られた沖積平野は際立った存在である。そこでは早くから米作りが定着し、人々が定住したと考えられる。川棚川下流の中ノ浜遺跡は、下関市の梶栗浜遺跡、豊北町の土井ヶ浜遺跡と並んで、弥生時代の著名な埋葬遺跡である。他にも、木製の鉞や田下駄などが出土した無田遺跡をはじめとし、下関遺跡・井尻遺跡・吉永遺跡・新土手遺跡など多くの弥生の遺跡が展開する。未発掘ではあるが川棚川左岸の通称高野台地上には弥生時代の大規模な集落跡が分布することが知られており、今後の調査が期待される。また、低地を見おろす標高200mに近い城山山頂には高地性集落としての城山遺跡がある。

時代は古墳時代に移る。稲作を主とした、豊かな生産基盤を持つ豊浦低地では、多数の古墳が築かれていく。船頭遺跡西側の小高い丘の上には、響灘沿岸で最も北に築かれた前方後円墳として有名な大門古墳がある。船頭遺跡の昨年度の調査では古墳時代の住居跡が発見されており、銅鏡の破片が出土した植田遺跡とともに大門古墳に関わる人々が生活した集落の可能性がある。一方、室津湾湾頭には90基余りの古墳が密集する甲山古墳群がある。これは、見島のジーンコ古墳群とともに古墳時代終末から奈良・平安時代まで営まれた全国でも珍しい古墳群である。近辺には、須恵質の土馬や瓦片が出土した下関田遺跡や上関田遺跡・汐汲遺跡があり、当時の人々の生活の跡がうかがえる。また、先の高野台地の裾部、林崎遺跡では古墳時代の住居跡が発見されている。

古代以降、豊浦低地では条里制の整備が行われ、さらに荘園へと発展していく。先に述べた「吉永庄」と並んで、川棚川流域には嘉祥寺領「川棚庄」があった。その時代の遺構を伝える地名として「加正寺堤」「九門」「小目代」などが残る。この二つの荘園の経営が途絶えるのは室町期頃とされる。船頭遺跡から発見された中世の屋敷跡と思われる建物跡は、この時代の人々の生活を物語るものである。やがてこの地は大内氏の一円の支配下におかれ、中世末期には内藤氏の所領となっていく。

参考文献 『豊浦町史』『豊浦町史 二』『豊浦町史 三 考古編』（豊浦町史編纂委員会 1979 1982 1992）

『山口県百科事典』（山口県教育会 1982） 『山口県地名大辞典』（竹内理三 1988）

『土地分類基本調査 安岡』（山口県 1974）『日本城郭大系 別巻Ⅰ 中世荘園と館』（服部英雄 1981）

Ⅱ 調査の経緯と概要

山口県教育委員会では、農業基盤整備事業に伴う工事中に埋蔵文化財を保護するため、山口県農林部耕地課と協議を行い、現状保存が難しい遺跡については記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施してきた。

豊浦町吉永に位置する船頭遺跡も県営ほ場整備豊浦第二地区（第六換地区）の対象地となったため、事前の発掘調査を実施することとなった。対象面積が広大であるため、調査期間を2年とし、調査は財団法人山口県教育財団が県農林部から委託を受け、山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて、これら両機関が合同で行うこととなった。

調査初年である昨年度は、ほ場整備により新しく整備される町道の西側を調査対象地とし、南から順に第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区と調査区を設定し発掘調査を実施した。調査面積は約5000㎡で、弥生時代から中世にいたる集落跡が発見された。本年度は昨年度に引き続き町道の東側、面積約7600㎡を調査範囲とし、発掘調査が行われることとなった。

平成6年4月27日、現地における地権者等関係諸機関との打ち合わせを行った後、5月10日から発掘調査を開始した。昨年度に引き続きの調査であることから、昨年度の第Ⅰ・Ⅲ地区のそれぞれ東側に調査区を設定し、第Ⅳ地区、第Ⅴ地区とした（第2図）。

まずはじめに、地層及び遺構の分布を把握するため、事前調査の資料をもとに対象地区に16本のトレンチを設定し人力で掘り下げた。この結果、調査地区全域にわたり、遺構の分布が確認された。基本的な層序は、耕作土→盤土→黄褐色土の地山で、この地山を掘り込む状態で遺構が検出された。なお地勢が低くなる第Ⅳ地区中央と第Ⅴ地区北側で、地山上に褐色土の遺物包含層が認められた。

調査は重機による表土除去後、人力による精査を行い各遺構を検出した。その結果、第Ⅳ地区では昨年度検出した溝の延長部を確認することができた。そこで遺構番号は昨年度の遺構と同一と考えられるものは同じ番号とし、新たに発見された遺構については、昨年度からの続き番号を設定した。

各地区の遺構検出を行った後、第Ⅳ地区から遺構掘り込みを開始した。この地区の特徴的な遺構として方形に巡るいくつもの溝があり、その区画内に多数の柱穴が認められた。そこで溝とそれによって区画された地区を単位ごとに調査していった。これにより柱穴の配列から認められた複数の建物跡と溝は、ほぼ同時期であることが判明した。さらに区画内には墓も発見され、溝・建物跡・墓といった遺構の組み合わせが抽出できた。この調査成果を基本とし、他の区画地の調査を順次進めていった。



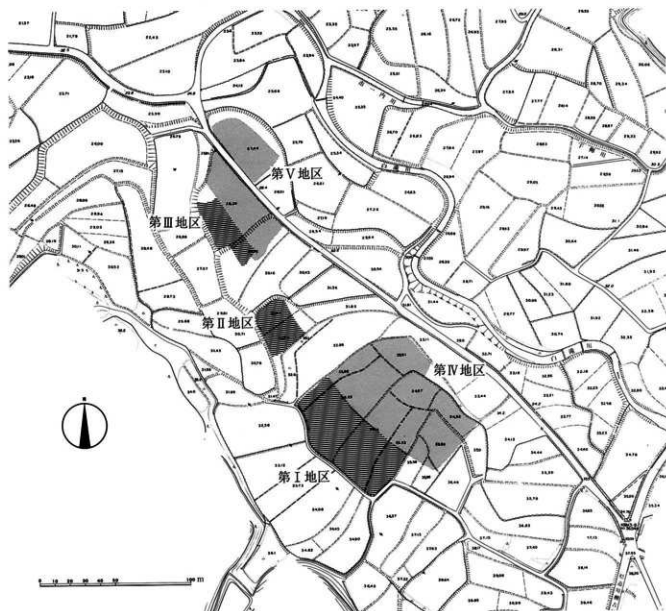
これによって第Ⅳ地区は、中世の溝に囲まれた屋敷跡群を明らかにすることができた。

調査は夏を迎える。今年は近年にない猛暑であり、降雨量の少なさと熱暑のため調査区の地山面も極度に乾燥してコンクリートのような堅さであった。そのため掘り込み作業はなかなかかどらない。深刻な水不足は発掘現場でも同じで、今年ほど雨を望んだ年はないであろう。

厳しい夏が終わりを告げようとする頃、調査は第V地区に進んだ。ここで注目されたのが丘陵を縦断する溝と10軒の竪穴住居跡である。そこで竪穴住居跡から掘り込みを進め、弥生時代後期と古墳時代中期の住居跡であることを確認した。住居跡と並行して溝の調査も行う。住居跡は残存状況があまりよくなかったが、溝は深さが2mにもおよぶところもあり、礫と多量の土器が多数発見された。

以上発見された遺構は、竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡34棟、土坑9基、墓5基、弥生土器が多量に出土した溝1条の他、中世の溝多数を検出した。これらの遺構・遺物は当地域の歴史を明らかにするに重要なものである。そこで発掘調査の成果を地元の人々に知ってもらうため、10月15日に現地説明会を開催した。約100人の熱心な見学者が参加され、ふるさとの歴史の一端を実際の遺構・遺物を見てもらうことで体感してもらった。

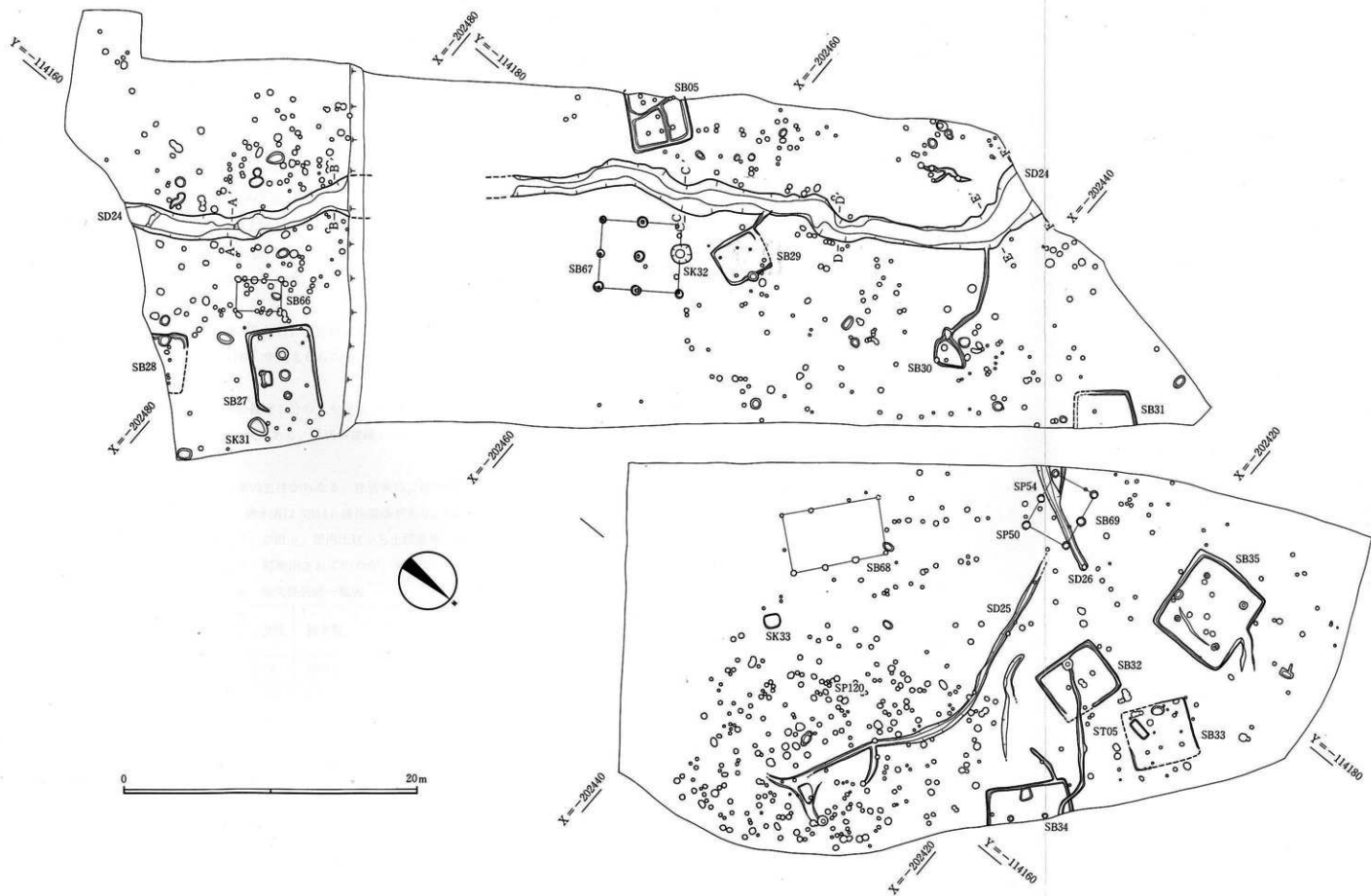
調査は終盤。各遺構の実測・写真撮影、さらに遺跡全域の空中写真撮影を行い、11月1日現地におけるすべての調査を終了した。その後、県埋蔵文化財センターにおいて、調査資料を整理し、出土遺物の復元・実測を実施して、この報告書を刊行した。以下、次章より船頭遺跡の全容が明らかとなる。



第2図 調査区設定図



第3图 第四地区遺構配置図



第4图 第V地区遺構配置図

Ⅲ 遺 構

本年度発掘調査で見えられた遺構は、竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡34棟、土坑9基、土坑墓4基、石棺墓1基、溝・溝状遺構14条、柱穴約2200基である。第Ⅳ地区からは溝に囲まれた建物跡や墓など中世の遺構が多く検出され、第Ⅴ地区では竪穴住居跡・溝状遺構などの弥生・古墳時代の遺構を多く検出した。遺構面は後世の水田開発により削平を受けており遺構の残存状況はよくない。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡10軒はすべて第Ⅴ地区で検出され、いずれも丘陵の縁辺部に位置し、丘陵を取り囲むようにある。住居の構造から3つに分類できる。長方形住居で主柱2本、屋内土坑を持つもの(SB27・34)と、方形で主柱2本または4本で屋内土坑を持つもの(SB05・28・32・33・35)、なおこのうち排水溝を持つ住居はSB05・32である。また主柱が特定できない住居としてSB29・31がある。いずれも上面を削平されており、遺構の残存状況は芳しくない。時期はSB27・29・34が弥生時代後期、SB28・32～35は古墳時代中期(5世紀後半～6世紀にかけて)とみられる。他は出土遺物が少なく時期決定が困難である。

SB27 (第5図 図版4) 主柱2本の長方形住居。主柱間の浅い土坑は炉跡とみられ、周辺に焼土がみられた。南東の屋内土坑には砥石(174)が据えられた状態で出土。土坑の両端には支柱が2本位置する。埋土中から器台(8)が出土。

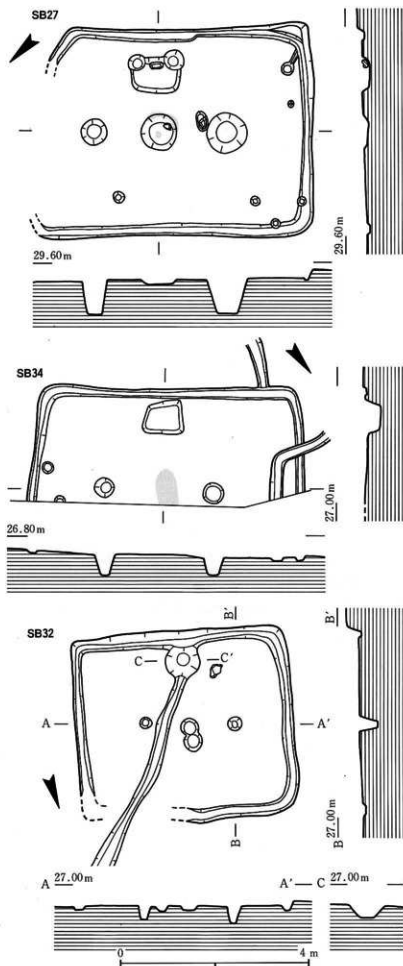
SB34 (第5図 図版6) 方形竪穴住居の推定2分の1を検出。主柱は2本で、その間に焼けしまりの跡が認められた。住居南辺には屋内土坑がある。住居の規模・形態ともSB27に類似する。弥生土器の裏底部(1)が出土。

SB32 (第5図 図版4) 方形住居で2本の主柱からなる。住居南辺に屋内土坑があり、そこから排水溝が屋外に続き、丘陵低位に向かう。排水溝はSB34と前後関係があり、SB34が古い。住居南東部の床面から小型丸底壺(5)、台付鉢(7)が出土。屋内土坑から土師器甕(6)が出土。

SB05 (第6図 図版6) 昨年度の調査で一部検出されていたが、本年度の調査により方形竪穴住

第1表 竪穴住居跡一覧表

住居 番号	平面形	規 模 (cm)			床面積 (㎡)	主柱	軸方位	備 考
		東西	南北	壁				
05	方形	400	430	10	12	4	N39°E	排水溝
27	長方形	430	580	22	22	2	N44°E	屋内土坑・砥石出土・焼土塊
28	方形						N58°E	屋内土坑
29	方形	355	310	4	8		N68°W	屋内土坑・排水溝
30								周溝・排水溝のみ残存
31	方形	420					N43°E	
32	方形	460	410	22	15	2	N75°E	屋内土坑・排水溝
33	方形	460	410		16	4	N56°W	屋内土坑
34	長方形	590		2		2	N45°E	屋内土坑
35	方形	635	570	41	31	4	N2°E	屋内土坑



第5図 SB27・34・32実測図 網目…焼けしまり

居であることが確認された。ここは昨年度資料と合成して実測図を掲載する。方形住居で主柱は4本。なお主柱間に支柱とみられる浅い柱穴を2つ確認した。このような形態の住居は昨年度調査のSB03でも確認されている。住居内には屋内土坑と壁溝および床面から屋外に続く排水溝を確認した。

SB29 (第6図 図版6) SD24に隣接するように位置する。壁面は削平を受け、わずかに屋内土坑、周溝及び屋外に延びる排水溝が検出された。排水溝はSD24に流れ込むようにみえるが、両者の前後関係は定かでない。床面に検出された柱穴は不規則で、主柱の配置は不明である。

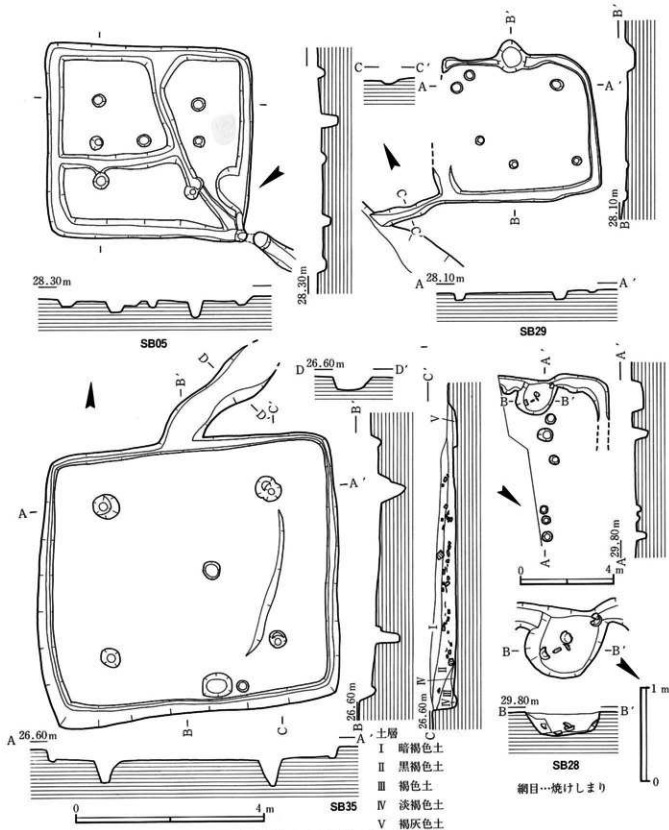
SB28 (第6図 図版6) SB27の南東に位置し、住居の推定3分の1を検出した。主柱は推定4本。住居西辺にある屋内土坑から土師器の塊4個体(9-12)が出土。

SB35 (第6図 図版5) 今回の調査で最大の竪穴住居で、床面は31㎡。方形住居で主柱は4本。壁面に沿って深さ約10cmの周溝が巡り、東側床面には幅50cmのベッド状の高まりが見られる。また、住居北側の壁から北東の向きに溝状のくぼみが、約1.4m検出された。土層観察から住居に付属する遺構であり、中から炭・焼土が検出された。住居床面には竈の火床はみられないが、住居内からは置き竈(52)が出土している。そのため、竈の煙道の可能性も考慮しておきたい。住居内からは多量の土師

器 (16~44、49~51)・須恵器 (45~48) が出土。これらは住居廃絶の際に廃棄されたものと考えられる。

(2) 掘立柱建物跡

今回の調査では掘立柱建物を33棟復元することができた。これらの建物はSDに囲郭された区画地の中に位置し、出土遺物からSDとほぼ同時期の15~16世紀と考えられる。SDと建物の規模・配置



第6図 SB05・28・29・35実測図

から、区画内の中心的な建物（3間×3間・4間×4間の総柱建物、2間×4間など）とその付属棟とみられる建物数棟から構成される。なおSB49とSB59は建物の規模、棟方向が他の中世建物と違うため、時期が異なるとみられる。

SB67（第7図 図版10） 第V地区。SK32により柱穴の1つを失っているが2間×2間の総柱建物。棟方向はN36°W、桁行長5.1m、梁行長4.6m。柱間の平均は桁行方向2.6m、梁行方向2.3m。柱穴の直径50～75cm、深さ3～7cm、柱根の規模は直径16～30cm。遺物は出土していないが、遺構の配置から竪穴住居に付属する建物の可能性も考えられる。

SB69（第7図 図版10） 第V地区の竪穴住居群（SB32～35）の南に位置する1間×2間の建物である。棟方向はN78°E、桁行長4.0m、梁行長3.1m。柱穴の規模は直径50～60cm、深さ25～43cm。SP56・57より土師器片が出土。SB67と同様、竪穴住居との関係が考慮される。

SB59（第7図 図版10） 第IV地区北端に位置する3間×3間の総柱大型建物である。棟方向はN74°W、桁行長7.9m、梁行長7.4m。柱間の平均は桁行方向2.6m、梁行方向2.4m。中世のSD07・21・22・23により柱穴上面を削平されているが、柱穴の平面形は方形が多く、規模は直径35～100cm、深さ10～60cm。SP51・54より須恵器小片、SP52・55より土師器片が出土。他の中世建物と規模・棟方向が異なる点や、柱穴出土の須恵器は8世紀とみられるので、この時期の建物の可能性もある。

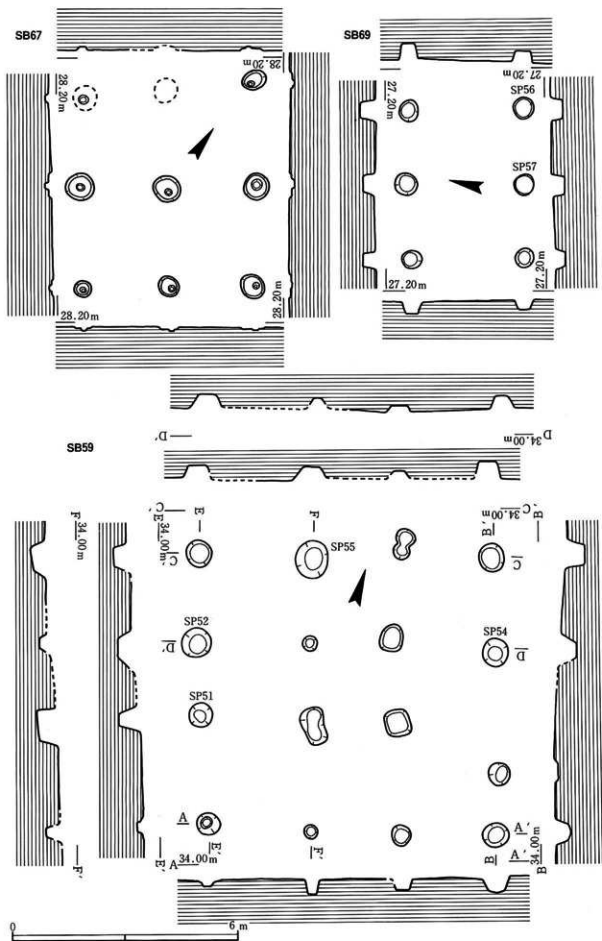
SB37（第8図 図版9） 第IV地区南東端、SD01に囲まれた敷地内に約200の柱穴密集地が検出され、いくつかの柱穴には柱根が残存していた（図版11）。重複する柱穴は、複数の建物を何度と建て直しを行ったものと考えられる。ここでは3棟（SB37～39）を復元したが、まだいくつかの建物を想定することは可能であろう。ここではSB37について述べる。

棟方向はN36°E。梁方向は4間であるが、桁方向は調査区外にのびる可能性がある。総柱の大型建物。梁行長7.4m。柱間の平均は桁行方向1.8m、梁行方向2.1m。柱穴の規模は直径30～90cm、深さ17～52cm。柱穴からは土師質土器の皿・青磁片および多数の土師質土器片が出土。またSP34より元豊通宝、SP35より多量の焼土塊が出土した。

SB52・53・54（第9・10図 図版9） 第IV地区SD05・06・20に囲まれる地区に位置する。建物の配列やSD05・ST03との関係から、SB53が建てられた後SD20によって拡張された区画内にSB52が建てられたとみられる。SB54はSD内の位置と棟方向から、SB53と同時期の可能性もある。

SB53は、棟方向N48°Eの3間×3間の総柱建物である。桁行長7.6m、梁行長5.6m。柱間の平均は桁行方向2.5m、梁行方向1.8m。柱穴の規模は直径30～50cm、深さ10～24cm。遺物はSP41より瓦質土器片、SP44より土師質土器片が出土。SB52は2間×4間の建物。ST03の墓坑の一部を壊して建てられているので、これより時期が新しい。棟方向はN37°W、桁行長7.3m、梁行長3.8m。柱間の平均は桁行方向1.8m、梁行方向1.9m。柱穴の規模は直径25～55cm、深さ25～37cm。瓦質土器片・土師質土器片に混じり、SP42より輪羽口、SP50より焼土塊が出土。SB54は1間×3間の建物で、棟方向はSB52とほぼ同じくN38°W、桁行長6.5m、梁行長3.8m。柱穴の規模は直径40～70cm、深さ17～55cm。SP43・46・47・48・49より土師質土器片が出土。

SB47（第10図） 第IV地区北東端に位置する2間×4間の建物である。棟方向はN40°W、桁行長8.2m、梁行長3.2m。柱間の平均は桁行方向2.1m、梁行方向1.6m。柱穴の規模は直径30～50cm、深



第7图 SB67·69·59实测图

さ10~40cm。遺物はSP37より土師質土器片が出土。

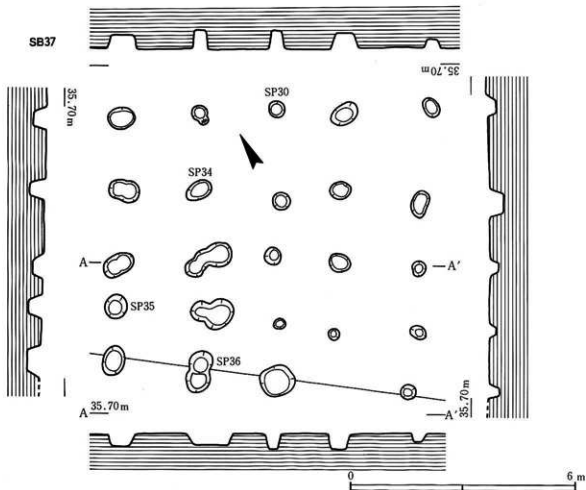
(3) 溝・溝状遺構 (第11・12図 図版7・8・10)

第IV地区から11条、第V地区から3条の溝または溝状遺構を検出。第IV地区では昨年度検出されたSD01・02・05・06・07の延長部分も確認された。これらは方形の区画を形作り、区画内には掘立柱建物、土坑、墓などの遺構が発見された。上面の削平により、途中途切れるSDもあるが、区画された敷地の数は7。方形の一边は19~30mを測る。また第V地区では埋土に多量の弥生土器を含むSD24を検出。

SD01 SB36~41を取り囲む。SDは調査区外まで続き、確認されたSDの一边は36m。幅36~200cm、深さ10~65cm、溝断面はV字型に近い。総延長は66m。埋土中より須恵質土器底部、瓦質土器鍋、青磁塊が出土。

SD05・06・20 SB50~54・58を取り囲む。昨年度と合わせると区画地の面積は約380㎡。SD20はSD06のおよそ2m東側に位置し、敷地を広げるため新たに掘り込まれたSDの可能性ある。出土遺物はSD05・06より瓦質土器片・土師質土器片・青磁片など。

SD07 昨年度調査された第I地区で検出された部分とを合わせると総延長138mに及ぶ。丘陵を横断し、検出されたSD区画地をすべて取り囲むように位置する。遺物は瓦質土器片、土師質土器片、陶器片、青磁片が出土した。



第8図 SB37実測図

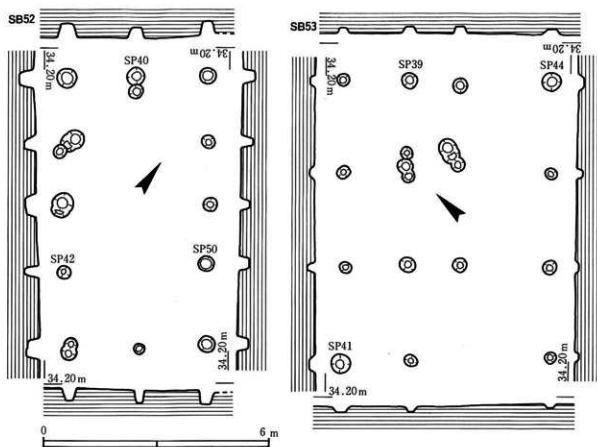
SD24 (第12図) 第V地区丘陵を南北に貫く溝状遺構。検出された長さは、一部削平を受けた部分も含めて約60mに及ぶ。幅約150~300cm、北端で最深部188cmを測る。断面はU字型か台形。土層観察では壁面に流水によるえぐれがみられた。丘陵上の表流水を集めて低位に流す排水溝の役割を持っていたものと考えられる。埋土中からは多数の石とともに弥生土器片が破棄された状態で出土した。おそらくSDを利用されなくなった時に埋め戻しをおこなったとみられる。

(4) 墓

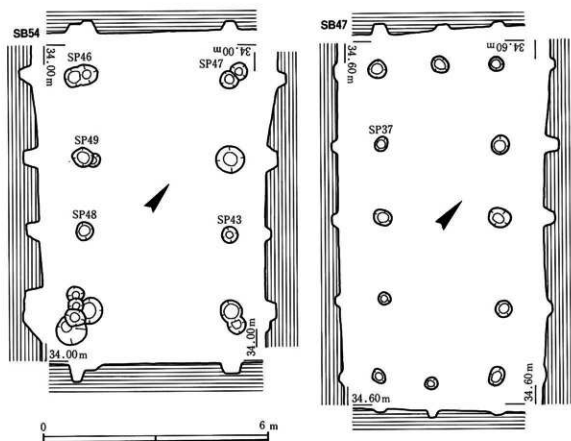
今回の調査では総数5基の墓を検出した。その内訳は、木棺墓2、土坑墓2、石棺墓1。木棺墓は桶形と箱形の2種類がある。土坑墓の2基も木棺が使用された可能性がある。ST01・03は溝に囲まれた区画内の建物に隣接するように位置する。

ST01 (第13図 図版12) SD01に囲まれる区画内で、SB36の東に近接して検出された。墓坑の平面形は長軸150cm・短軸120cmの隅丸長方形。長軸方向はN44°E。墓坑の西側はさらに2段に掘りくぼめられ、その中心の径60cm、深さ69cmの坑から直径40cmの桶棺が検出された。副葬品は棺外に土師質土器の皿3枚(122~124)と、棺の下から坏4枚(125~128)が出土。

ST02 (第13図 図版12) 第IV地区南東部の遺構の希薄な地区に位置する。埋土上位には墓標に使用されたと思われる石が認められた。墓坑は、長軸115cm、短軸85cmの隅丸長方形で深さは42cmある。長軸方向はN42°E。墓坑の南東部から土師質土器の皿2(129・130)・坏2(131・132)が出土。



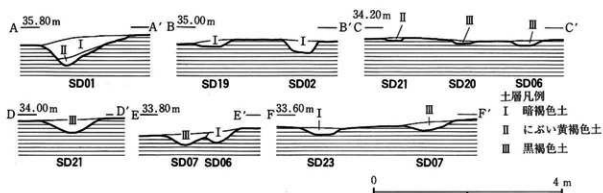
第9図 SB52・53実測図



第10図 SB54・47実測図

ST03 (第13図 図版12) 第Ⅳ地区北西部、SD05・06に囲まれる区画地の東隅にSB53に近接して位置する。墓坑の形態は、長軸135cm、短軸120cm、深さ52cmの隅丸長方形である。長軸方向はN52°E。墓坑のほぼ中央に箱形の木棺が納められるが、その長軸方向はN25°Eであり、墓坑の長軸方向と異なる。おそらく墓坑自体は区画溝に並行して掘り込んだが、木棺を安置する際には、南北方向を意識したためと考えられる。木棺の内法は長軸70cm、短軸42cm。木棺内に落ち込んだ蓋材の下から銅銭6枚(144~149)が、また棺外の東側から土師質土器坏3枚(133・135)が出土。また埋土中から鉄釘5本(136~140)が出土。

ST04 (第13図 図版11) 第Ⅳ地区西端に位置する箱式石棺墓。墓坑は、長軸60cm、短軸推定45cmの長円形。長軸方向はN30°E。棺の内寸法は長さ30cm幅12cm深さ13cm。蓋石は1枚で、小口石は南



第11図 SD土層断面図



第12図 SD24実測図

北とも1枚、側石東西とも2枚。大きさから新生児または乳児の墓とみられる。このような石棺は弥生時代のそれに形態が似るが、中世のSD05との前後関係からST04が後出である可能性があるので、ここでは中世墓と考えておきたい。

ST05 (第13図 図版12) 第IV地区北側に位置し、古墳時代のSB33内につくられている。墓坑は長軸140cm、短軸65cmの長方形で、深さは20cm。墓坑底面には平らな石が敷き詰められ、その上に木棺を安置したとみられる。北側から鉄製品(143)及び土師質土器皿(141・142)が出土。

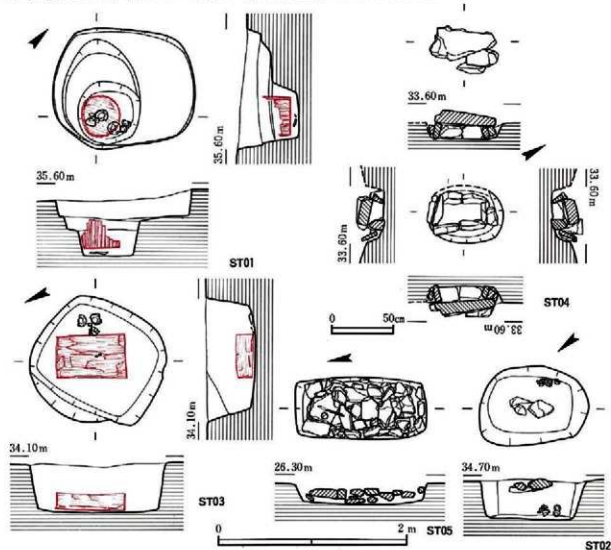
(5) 土坑

今回の調査では第IV地区に6基、第V地区に3基の土坑が検出された。平面形から円形・長円形・隅丸長方形・不整形に分かれる。SK32・33を除いて、深さは7~35cmと浅い。

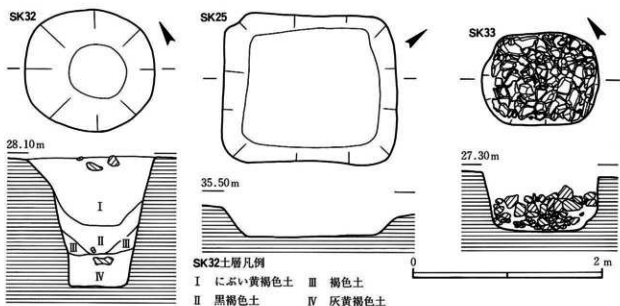
SK32 (第14図 図版11) 第V地区のはほぼ中央、SD24の東側に位置する。平面形は直径約140cmの円形。深さは135cmを測る。埋土は4層に分かれる。遺物は全く出土しなかった。

SK25 (第14図 図版11) 第IV地区の南端、SD01に囲まれる区域に位置する。平面形は長軸185cm、短軸155cmの隅丸長方形で、深さ35cmを測る。埋土は暗褐色土の単一層。埋土中から土師質土器片・瓦質土器片が出土。位置関係から建物に付随する施設の可能性がある。

SK33 (第14図 図版11) 第V地区の東側、遺構の希薄な場所に位置する。平面形は長軸125cm、短軸100cmの隅丸長方形で、深さ62cmを測る。埋土は褐色土の単一層。坑内には、長径5~25cmの石120近くを検出したが、石組はない。石と一緒に瓦質土器の鍋片が出土した。



第13図 ST実測図



第14図 SK実測図

Ⅳ 遺物

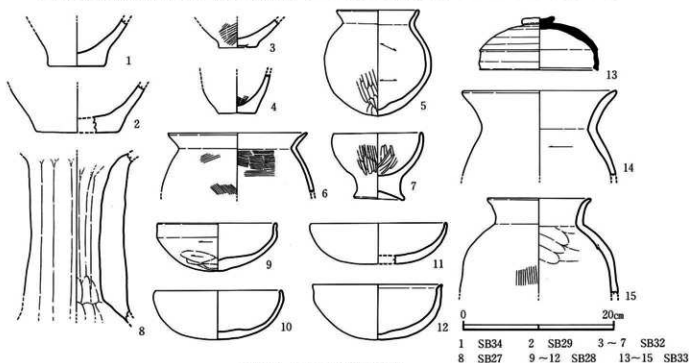
平成6年度の船頭遺跡調査からは、弥生～古墳時代、平安時代後期、15～16世紀にかけての土器、石器、鉄器などの遺物が出土した。これらの遺物は平成5年度の調査とはほぼ同時期のものであるが、その出土量は今回の調査が多い。

以下、遺構ごとに主たる遺物を取り上げる。

竪穴住居跡出土の遺物 (第15～17図 図版13・14)

発見された10軒の竪穴住居跡のうち、SB10からは破棄された状態で多量の土器が出土したが、他の住居跡は削平が著しいため、出土遺物は少ない。1・2・8は弥生土器。13・45～48は須恵器。他は土師器である。

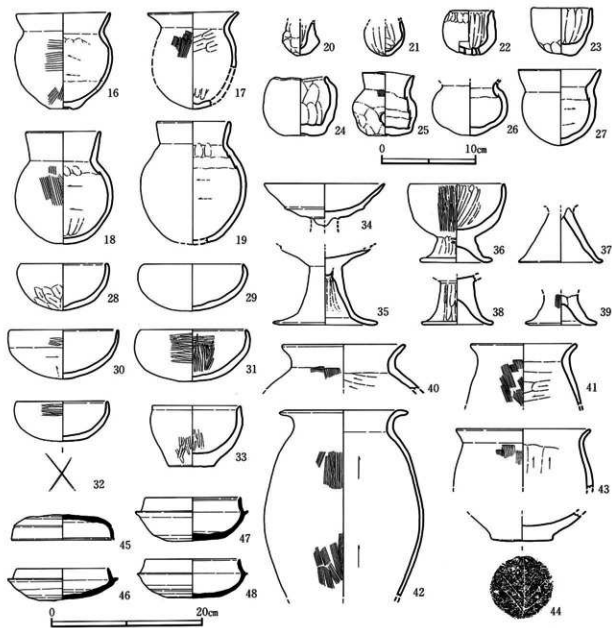
1はSB34、2はSB29出土の平底の壺底部。3～7はSB32床面出土。4はミニチュア土器で口縁



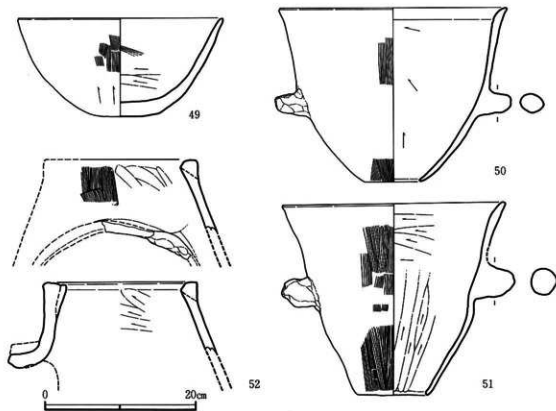
第15図 SB出土遺物実測図

欠損。3・6は甕。くの字状の口縁で胴部は張り、底部は小さくわずかに上げ底にする。ハケメ調整。
 5は完形の小型丸底壺。短く内弯気味に立ち上がる口縁部に球形の胴部がつづく。内外面ミガキ調整。
 7は小型の台付き鉢。底部は上げ底で、内外面ミガキ調整を施す。8はSB27床面出土。口縁部と裾部を失うが器台とみられる。筒部径は10cmと大型で、器壁も厚い。内面ナデ調整。9～12はSB28の
 屋内土坑から出土した壺。口縁径に対して器高は低い。形態は、ゆるく内弯して口縁にいたる10・11、
 途中から垂直に立ち上がる9、口縁端部が短く曲がる12がある。9はケズリ調整が残り、他は摩滅する
 がミガキ調整であろう。13～15はSB33出土。13は須恵器有蓋高坏の蓋。天井部と口縁部の境は明
 瞭な段差があり、口縁端部内面に段を持つ。貼り付けのつまみは中央がくぼむ。ロクロ右回転。14・
 15は甕。くの字状の口縁で端部は丸くおさめ、14は口縁が長く、内面ケズリ調整。15は口径より胴部
 が張り、外面ハケメ調整、内面ナデ調整。

16～52はSB35出土。16～19は小型の丸底壺。口縁部は、くの字状で胴部径と同じ口径の16、胴部



第16図 SB35出土遺物実測図(1)



第17図 SB35出土遺物実測図(2)

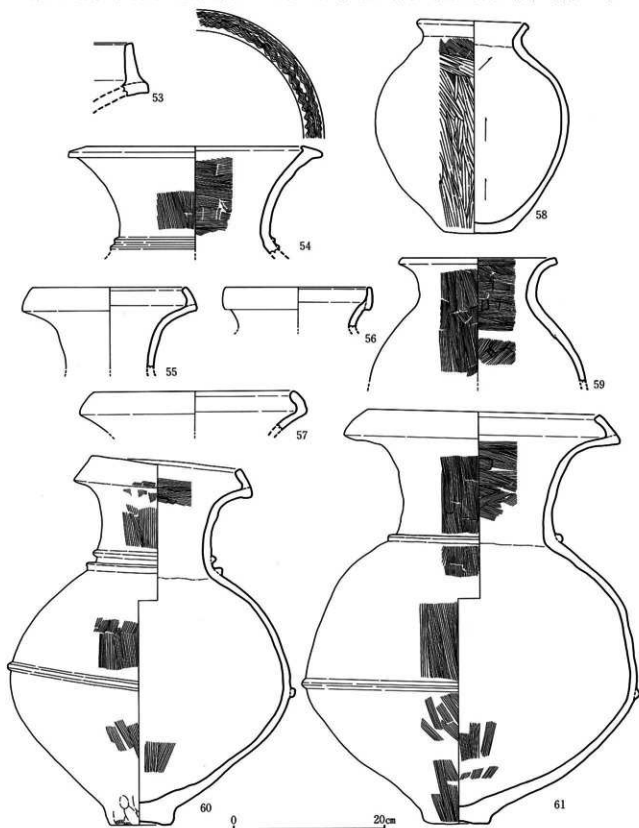
径より大きい口径の17、外傾して立ち上がる18・19がある。胴部は縦に長い球形で、16はわずかに上げ底。外面ハケメ調整、内面ケズリ調整。20～27はミニチュア土器。25は胴部中央に穿孔を有し、壙を模したものか。26・27は壺型である。22は底部に2つの穿孔がある。いずれも手捏ねによる調整痕が明瞭に残る。28～32は壺。内外面ミガキ調整。底部外面はケズリ調整もみられる。32は底部に「X」のヘラ記号あり。33は鉢。平底で、口縁端部はわずかに外傾する。ミガキ調整。34～39は高坏。34・35の高坏は、坏部口縁と体部の境に明瞭な段を持ち、口縁端部は尖り気味におわる。脚部裾は大きく屈曲して外に広がる。36は短脚の高坏。八の字の短く太い脚部に、壙に似た大きな坏部が乗る。内外面ミガキ調整。40～43は甕。40はくの字状の口縁を持ち、大きく張る胴部を持つ。41・43は短く屈曲する口縁で胴部はあまり張らない。42は大きく外反して端部は水平近くまで曲げる口縁に、口径とさほど変わらない胴部が続く。いずれも外面ハケメ調整、内面ケズリ調整。44は底面に木の葉圧痕のある底部。45～48は須恵器。45は坏蓋。口径に対して器高が低い。口径13.4cm。口縁部と体部の境に明瞭な段差があり、口縁端部に段を持つ。46は器高が低い坏身。口径12.1cm。立ち上がり部は内傾して端部は尖り気味。47・48は46と比較すると器高が高い坏身。受け部は短く、口縁部はわずかに内湾して立ち上がり、端部内面に段を持つ。口径12.6cm、12.4cm。いずれもロクロ右回転。

49は大型の鉢。平底に近い丸底で、胴部は直線的に外傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。厚手。外面ハケメ調整、胴部下半はケズリ調整。口縁にかけてはハケメ調整。50・51は甕。51は直線的に外傾して立ち上がる胴部に対して、50は胴部がやや丸みを帯びる。口縁は肥厚して丸くおさめる。外面ハケメ調整、内面ケズリ調整。なおSB10からは50・51以外に甕の胴部片、把手片が複数個体分出土していることが特徴的である。52は置き竈の釜穴から焚き口の底にかけての破片。釜穴の上面は

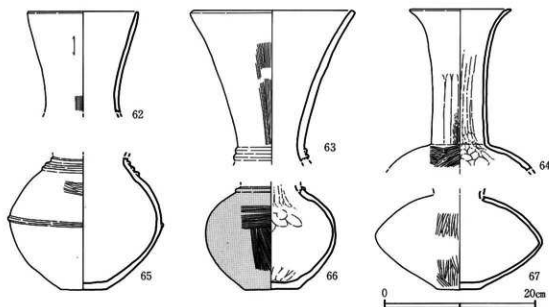
器壁を肥厚させて幅3cmの平坦面をつくる。復元される釜穴径は15.2cm。庇は貼り付けでその剥離痕が残る。器壁の厚さ1.5cmと厚手。外面は粗いナデ調整とハケメ調整。内面はケズリ調整。

SD24出土の遺物（第18～21図 図版15～17）

53～61は壺。このうち壺の形態がよく分かる資料として60・61がある。上底の底部に偏球形の大きく張った胴部で、最大径は胴部中央やや下方にある。断面三角形と台形の突帯が胴部と頸部に1条



第18図 SD24出土遺物実測図（1）



第19図 SD24出土遺物実測図(2)

または2条巡る。頸部は胴部径の二分の一程度の大きさで、そこから直立気味に立ち上がって大きく外反し、複合口縁にいたる。複合口縁は反転部で明確な稜線を持ち、直線的に内傾する。内外面ハケメ調整。この他複合口縁の壺は53・55-57がある。55・57は60・61と同形態で、端部を丸めるか面を持つ。このタイプの複合口縁壺が最も多い。そのほか53は大型の複合口縁壺で、反転部から垂直に立ち上がり端部が面を持つ。56の複合口縁は拡張部が短く垂直に立ち上がるが、端部は丸くおさめる。他の複合口縁とは拡張部の粘土接合方法が異なる。54は頸部に複数の突帯を巡らし、口縁部は鋸型口縁状で上下にわずかに拡張する。そして上面に6本単位の櫛描波状紋を2条施す。内外面ハケメ調整。58・59は口縁が短く外反する壺。58の胴部は肩が張り、最大径が胴部中央にくる。底部は平底ながらわずかに凸レンズ状平底をなす。外面ハケメ調整の後ミガキ調整。内面ケズリ調整。59は58に比べると胴部は張らない。内外面ハケメ調整。

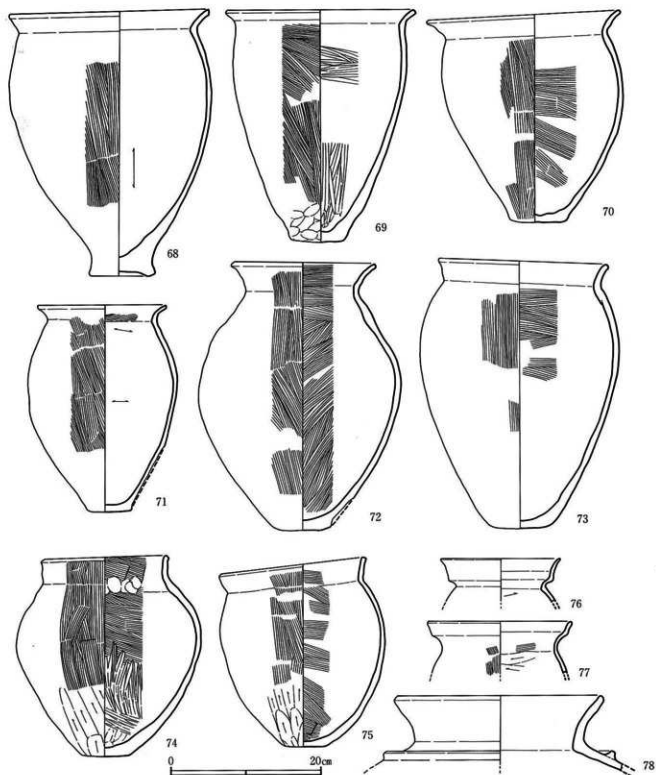
62-67は長頸壺。62・63・65・66は平底の底部に胴部は寸の詰まった球形で、胴部中央と頸部に突帯を巡らす。頸部から口縁にかけては長くゆるやかに外反する。調整は外面ハケメ調整とミガキ調整を施す。64は形態が異なり、直に長く立ち上がり最後に短く開く口縁部を持つ。外面は丁寧なミガキ調整。薄手で胎土も精良、色調は褐色で他のSD出土土器とは異なることが注目される。66は丹塗りの痕跡が残る。67は算盤玉状の薄手の胴部で、平底。ミガキ調整。

68-78は甕。このうち68-73はくの字状に曲がる口縁を持つ甕。胴部の形態はさまざまで、口径より胴部最大径が小さいもの(69)、同等のもの(68)、大きいもの(71-73)がある。71・72は最大径が胴部中央にあり、73はやや肩の張る形態である。底部は68の上げ底以外は平底もしくはわずかに凸レンズ状に膨らむ平底。上げ底の個体数は少なく、ほとんどが平底もしくは凸レンズ状の平底である。調整は外面がハケメ調整。内面は68・69・71がミガキ調整、他はハケメ調整。多くの甕で外面に二次加熱による器壁の変色が認められる。

74・75は他の甕に比べると、口径に対して器高が低く、胴部も張る甕である。底部は丸みのある平底。74の口縁は直口で端部は丸くおさめる。75はそれよりくの字状の口縁に近い形態である。両者は

外面下半がケズリ調整、上半がハケメ調整。内面はハケメ調整で、74はそれに加えてミガキ調整も施す。76・77は山陰系の複合口縁甕であるが、他の土器群と時期的に符合しないため、流れ込みと思われる。78は大型の甕口縁部。肩部に突帯を持つ。

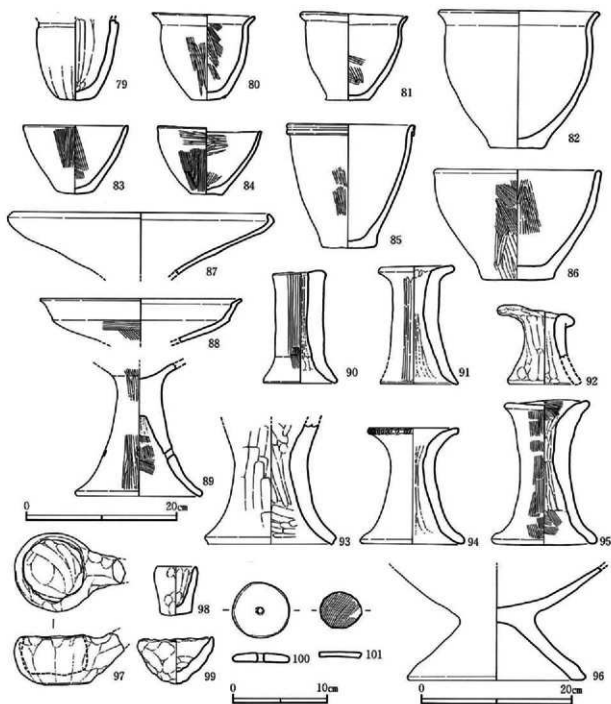
80～82は器高に対して口径が大きいことから鉢とみられる。短くくの字状に曲がる口縁で、底部は平底。内外面ミガキ調整。83・84・86は内湾して立ち上がり、端部を丸くおさめる鉢。85は口縁外面



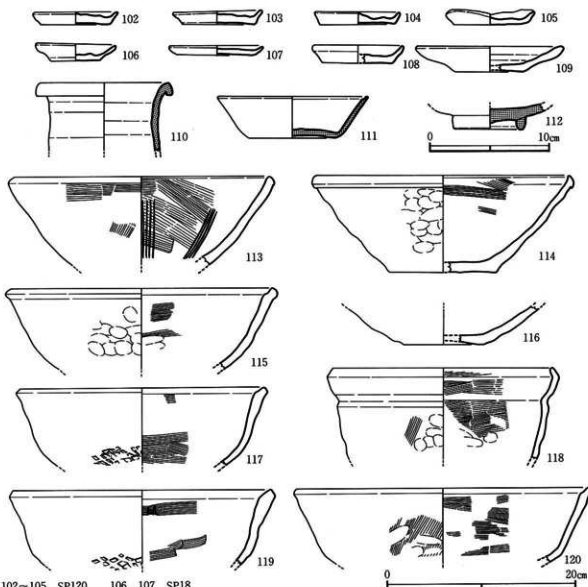
第20図 SD24出土遺物実測図(3)

に粘土を張り付け2条の突帯を持つ。83は凸レンズ状平底で、他は平底。ハケメ調整の後ミガキ調整を部分的に施す。

87～89は高坏。87は口縁先端が内側に丸みを持って曲がる。88は口縁部が短く外反し、端部は丸くおわる。外面ハケメ調整。89は脚部。4方向から穿孔し、外面ミガキ調整、内面ハケメ調整。90は支脚。筒状で裾部が広がる。外面ハケメ調整。91～95は器台。91は口縁下で明瞭にくびれて頸部がある器台。それに対して94・95は口縁径に対して台裾径が大きく、頸部と呼べるくびれは造りだしていない。94は端部に刻み目を施す。95はハケメ調整。93は厚手で大型の器台。内外面ナデ調整の痕跡残る。92はいわゆる「杓形器台」とよばれるもので、器高10.4cmと小型。頂部平坦面が傾斜し、突起が長い。



第21図 SD24出土物実測図(4)



102~105 SP120 106, 107 SP18

108 SP47 109 SP121 110 SP31

111, 117~120 SD08 112, 115, 116 SD01

113 SP11 114 SP114

第22図 SP・SD出土遺物実測図

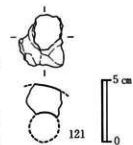
全体にナデ調整。支脚・器台はいずれも内面にシボリ痕やナデの跡が明瞭に残る。96は台付きの鉢または器台か。底径23.6cmと大型。

97は玉杓子形の土製品で、把手を欠損。口径6.2cm、深さ4.0cm。全体に指ナデ調整の跡が明瞭に残る。98・99はミニチュア土器。いずれも手捏ねの調整痕がみられる。100は土製紡錘車。径7.6cm。101は円盤状土製品。甕の破片を利用し周囲を打ち欠いている。

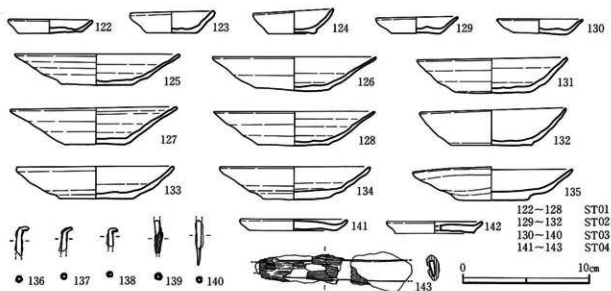
中世の建物跡・溝出土の遺物 (第21・22図 図版18)

建物跡・溝からの出土遺物は、土師質土器、瓦質土器、青磁・白磁、陶器などで、出土量は多くない。

102~108は土師質土器の皿。口縁を斜め上方に短くつまみあげる。口径6~7cmで色調は黄橙色。109は厚手の坏。口径11.8cm、器高2.1cm。いずれも糸切り底。110~112は中国南方産の輸入磁器。110は青磁の壺。玉縁状に捻り返した口縁を持つ。施釉は淡緑灰色釉。111は白磁の鉢か。萁筒底で口



第23図 輪羽口実測図

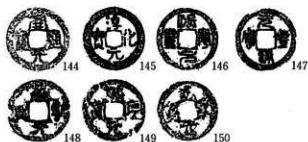


第24図 ST 出土遺物実測図

縁はいわゆる「口禿げ」。やや透明度が薄い白色釉。112は青磁碗底部片。高台内面と畳付けが露胎。施釉は緑灰色釉。いずれも15～16世紀とみられる。

113～115・117～120は瓦質土器。113は4条の卸目を持つすり鉢。口縁部外面をわずかに玉

縁状に肥厚させる。内面ハケメ調整痕が明瞭に残る。外面ハケメ調整とナデ調整。114はこね鉢で、SP32の底から出土した(図版11)。口縁外面を肥厚させ、内面も上につまみ上げる。内面は使用による磨滅痕がよくわかる。115・117～120は鍋。口縁部は、内側に屈曲させる118のほかは、厚く肥厚させ短く外傾させる。内面ハケメ調整。外面指圧痕や叩き痕がみられる。116は須恵質の甕底部。121は甗の羽口片。SP38から多くの焼土塊とともに出土。SP34からは150の元豊通宝が出土。



第25図 出土銭拓影

墓出土の遺物 (第24・25図 図版19)

墓からは土師質土器の皿・坏、鉄製品(釘・刀子)、銅銭が出土した。

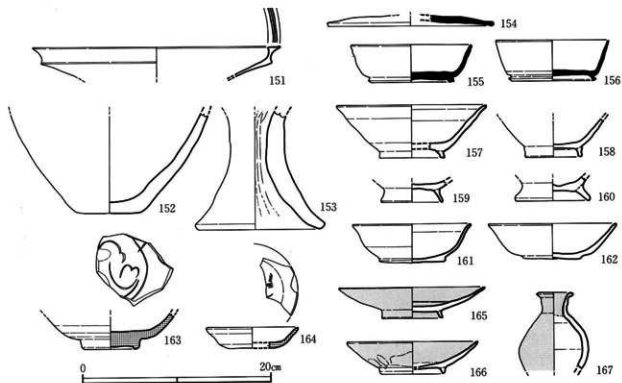
出土した皿・坏は形態のそれぞれ2種類ある。皿のうち、ST01出土(122～124)およびST02出土(129・130)は、薄手のつくりである。大きさは口径6cm程度で、口径に対して器高が高い。それに対してST05出土の皿は口径が7～8cmで、口縁を短くつまみあげる。坏はST01の125～128は薄手で口縁が直線的に外傾するが、ST02とST03の坏(131・132、133～135)はやや厚手で、口縁が内弯気味に立ち上がる特徴がある。なおこれらの土師質土器はいずれも糸切り底。

鉄製品はST03から木棺に使用された釘が5本出土。ST05からは鉄刀子が出土。切っ先と茎部を欠損する。身に木質が錆着。銅銭はST03から6枚出土。144は開元通宝。145は淳化元宝。146は熙寧元宝。147～149は残存状況があまり良くないが、熙寧元宝か。

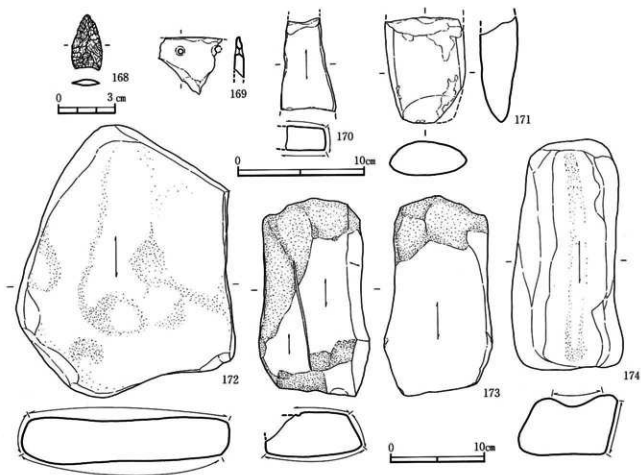
包含層出土の遺物 (第26図 図版20)

第IV地区中央、SD02に区画された敷地内の北側に包含層が検出された。この包含層は10～20cmの

厚さで、約10m四方の範囲に堆積していた。土層は2層に分けられ、上層のI層からは中世の土師質土器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器並びに平安時代の土師器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。下



第26図 包含層出土遺物実測図



第27図 出土石器実測図

層のⅡ層からの出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器などである。

151～153は弥生土器。151は高坏。形態的に後期前半の山陽系高坏であり、胎土に角閃石を含み硬質であることから、搬入品と考える。口縁平坦面に3条の凹線あり。152は壺底部。153は器台。154～156は須恵器。154は径17cmの蓋。155・156は高台のある坏。短くハの字に開いた底部に、胴部は外傾して立ち上がる。ロクロ右回転。

157～160は平安時代の土師器壺。157～160は高さのある貼り付け高台に外傾して立ち上がる口縁部を持つ。高台は垂直に立ち上がる158・159と、ハの字に広がる160・161がある。底面は160が糸切り痕が残るが、他はナデ調整を施す。161・162は坏。円盤状の底部で内湾して立ち上がる。161は糸切り底。胎土・焼成とも良好。

165は灰釉陶器の皿。口径14cm、底径6.8cm、器高3.4cm。貼り付け高台で口縁は内湾して立ち上がる。胴部下半はヘラ削り。素地は須恵質で、うすい鮮緑色釉を高台部と見込みを除いて施釉する。胎土精良で硬質。

166は緑釉陶器の皿。口径15.4cm、底径6.4cm、器高3.2cm。断面ハの字の貼り付け高台からわずかに内湾気味に立ち上がり、口縁部で短く屈曲する。内面に沈線あり。底部は削り調整をし、内外面はミガキ調整。素地は黄褐色の土師質で、淡緑色釉を全面施釉する。胎土精良で、やや軟質。167は緑釉陶器の小瓶。底部欠損。下膨れの胴部に外傾する頸部から口縁は水平に短く屈曲する。素地は灰白色の土師質でやや軟質。胎土精良。淡緑色釉を頸部内面まで施釉する。

163は青磁碗。黄緑色釉を施釉し、疊付けと高台内面は露胎。見込みに片切彫りの曲線紋を施す。164は青磁皿。淡緑色釉を施釉し、底面は露胎。見込みに構描紋。両者は15～16世紀の中国南方産輸入磁器。

出土石器 (第27図 図版20)

ここでは各遺構から出土した石器をまとめて紹介する。168は黒曜石の石鏃。包含層Ⅱ層から出土。長さ2.9cm、厚さ3.5cm。基部がわずかにくぼむ。169は第Ⅴ地区出土の石包丁片。赤色頁岩製。170はSD24出土の砥石。砂岩製。欠損面以外を使用。仕上げ砥か。171は包含層Ⅰ層出土の太型蛤刃石斧。刃部の一部と基部を欠損。凝灰岩製。172～174は大型の砥石。172・173はSD24出土。砂岩製、花崗岩製。174はSB27の屋内土坑から出土。砂岩製。

V まとめ

船頭遺跡の調査は平成5年度・6年度の2か年にわたって実施された。調査総面積は約12,600㎡。調査によって堅穴住居跡15軒、掘立柱建物跡53棟、土坑33基、溝・溝状遺構26条、柱穴約4200個もの遺構が発見され、多量の遺物が出土した。ここでは平成5年度調査¹⁾と今回の調査成果をまとめ、各時代ごとに船頭遺跡の性格や特徴について述べてみたい。

船頭遺跡で人々の生活が開始されたのは弥生時代後期になってからである。この時期の遺構としてSD24があり、ここから大量の弥生土器が出土した。弥生土器のうち、壺は口縁反転部に稜線のある複合口縁壺で、頸部・胴部に断面三角または台形突帯を巡らす。堯はく字状の口縁に、胴部最大径は上位または中位にあり、長胴化の傾向があり、ほとんどが平底または凸レンズ状平底である。これ

らの形態的特徴を九州の後期土器編年²⁾に照合すれば、後期中頃の時期があてはめられるであろう。ただ第18図53の壺口縁は中期の鋤形口縁の退化形式ととれなくはない。また中期によくみられる上げ底や丹塗土器(66)も散見される。このように中期の要素も見いだせるため、後期前半から中頃と中期的に幅を持たせておきたい。これまで長門部における当該時期の遺跡調査例は少なく、出土土器も限られたものであった。今回のSD24出土資料は後期土器編年を考えるうえで重要な資料と言える。

このSD24は丘陵のほぼ中央を貫流し、地表流水を丘陵低位に流す機能を有していたと考えられる。同時期の遺構としてSB27、29、34が存在する。しかしSD24出土の土器に比較して遺構数が少ないことや削平が著しいことを考えれば、SD24を中心として丘陵縁辺に集落が広がっていたと推定される。その後終末期から古墳時代初頭にかけての遺構・遺物が発見されているが、集落は一時期縮小または移動したと考えられる。

再び集落が発展するのが古墳時代中期、5世紀後半から6世紀にかけてである。発見された住居はその配置から3軒前後(SB32-35)を一つのまとまりとして存在し、この単位が丘陵縁辺部にいくつかのグループとしてあったことがみてとれる。この位置関係は集落の中央に広場があったことを示すもので、SD25は居住区を区画する溝の可能性がある。このような集落構成は、弥生時代以降、集落の基本的な構造といえるであろう。ところで船頭遺跡西側の丘陵先端部に6世紀前半の前方後円墳である大門古墳が位置する。大門古墳の被葬者が当地域の有力首長として登場した背景の一つとして、吉永川流域の吉永低地における農業生産が経済的基盤としてあったとみられる。船頭遺跡の古墳時代集落はこの地域の水田開発に関与した集落の一部であったと見てよいだろう。なお出土遺物として注目されるのがSB35出土の置竈である。この時期としては県内初例。近隣でも出土例は少なく、北九州市長野A遺跡³⁾(5世紀後半)で確認されている。県内では6世紀になって作り付け竈の設置が一般化することから、竈の出現と構造を考える上で注目すべき資料である。

古代の集落は発見されなかったが、第IV地区包含層から10-11世紀の土師器・灰釉陶器・緑釉陶器が出土した。特に緑釉陶器は県内でも出土量が少なく⁴⁾、官衛・寺院など一般集落とは異なった遺跡から出土する例が多い。そのため船頭遺跡にも同様な遺構があったことも考えられる。今後周辺の遺跡を含めて、当地域の古代の様相を明らかにする必要がある。

中世期にはいと第I・IV地区が集落の中心となる。ここからは掘立柱建物跡52棟、溝23条が発見された。この掘立柱建物跡と溝の配置をしてみる(第28図)⁵⁾と、溝で囲郭された区画が7または8つあることがわかる。大きさは最大のもので約50m×30mをはかり、その区画内にまたいくつかの小さな区画割があったことがみてとれる。これらの区画割の中には何棟もの掘立柱建物跡が復元できた。建物跡と溝の時期は、溝と棟方向が一致すること、一部14世紀に遡るものもあるが大半は15世紀後半から16世紀前半にかけての遺物が両者から出土することなどから、同時期の遺構と考えられる。

溝で囲まれた建物跡の構造を、SD05による区画地を例にとって考えてみたい。区画地内には複数の建物があり、母屋とみられる3間×3間の総柱建物(SB53)とそれに附属する建物(1間×2間、1間×3間、2間×2間など)が2ないし3棟あったと考えられる。付属棟はその周辺の柱穴から輪羽口、焼土塊が出土していることから、作業小屋などの役割を果たしていたといえよう。このような母屋・付属棟(納屋・作業小屋)から建物群が構成されている。

このような建物群の構成を考慮して遺構配置を見ると、SB37-39、SB06などの大型の建物は、母屋と考えられる建物で、その周辺には付属棟が立ち並ぶ。また大型建物が無い区画でも、SB40・41、47・48、55・56、60・61のように中規模の建物が並立する場合が多い。このように母屋や納屋、作業小屋といった建物が各区画内にそれぞれ群として存在することが指摘できる。また各敷地内には建物跡の柱穴が希薄な地域がある。おそらく敷地内の作業場所としての広場や、菜園などの畑地として機能していたと考えられる。

さらに敷地内には墓が発見された（ST01-03）。すべての区画内にあるわけではないので、村落の墓地は他所にあったと考えられる。遺跡の南西約200mに寺の存在を示す新福寺堤があり、周辺には五輪塔が確認されているので、この地に村落の墓地があった可能性がある。なお敷地内に埋葬されたのは、墓坑や木棺の大きさなどから小児の可能性がある。井戸は第Ⅰ地区西端、SD06の西側にSK14がある。石組は原形をとどめていないが湧水があり大型の井戸とみられる。他に井戸は発見されなかったので、村落の共同井戸であったと推察される。

このような溝で囲郭された建物跡は、山口市吉田遺跡、堂々遺跡、吉田岡島遺跡、畠田遺跡、上辻・今宿東遺跡、防府市下右田遺跡、菊川町田畑遺跡、小出遺跡、坂ノ上遺跡、下関市秋根遺跡、市場遺跡など各地で発見されている。ただ囲郭する溝を部分的に検出した例が多く、船頭遺跡のように方形区画がまとまって調査されたのは、下右田遺跡につぐものである。これらの調査では、溝、建物、墓、井戸、広場などで構成されるところに共通点があり、名主層クラスなどの上層農民の屋敷跡と推定されている。船頭遺跡でも輸入陶磁器を保有し、母屋・納屋などの複数の建物からなる屋敷を構成ることのできた階層の人々といえ、他の調査例と同じく上級の富裕農民とみてよいだろう。なお船頭遺跡では屋敷地ごとで、建物の規模や数、建て直しの有無などの違いが指摘できる。これは敷地を所有した人物の村落における地位や経済的理由によるものかもしれない。いずれにしても今回の調査は囲郭された屋敷跡で構成される村落の形態を知るうえで、貴重な資料を提供してくれた。

「Ⅰ 遺跡の位置と環境」で述べたとおり、吉永の地は平安末期に「吉永庄」が置かれたとされ、その推定範囲の西端に遺跡が立地している。荘園関係の遺構は発見されなかったが、調査によって弥生・古墳時代の集落の発見、古代の緑釉陶器の出土、中世環溝屋敷の存在などが明らかとなった。さらに江戸期には遺跡西側を北浦街道が通っていたことなどを考えあわせると、今回の調査成果は、船頭遺跡の位置する一帯が原始・古代の時代から近世にいたるまで、吉永の中心的地域の一つであったことを物語るものであろう。船頭遺跡は豊浦町をはじめ、響灘に面する北浦の歴史を考える上で興味深い遺跡といえる。

注1) 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会「船頭遺跡」1994。

2) 武末純一「北九州における弥生時代の複合口縁壺」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』1982。

柳田康雄「高三邊式と西新町式土器」『弥生文化の研究4 弥生土器Ⅱ』1987。

3) 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「長野A遺跡3」1987。

4) 遺跡周辺では下関市長門国府跡、秋根遺跡、神田遺跡、菊川町下七見遺跡から出土している。

5) 平成5年度調査の第Ⅰ地区と6年度調査の第Ⅳ地区の遺構配置図を合成して主要なSB、SK、SDの位置関係を図示したものである。



第28図 船頭遺跡第I・IV地区遺構配置図



東より船頭遺跡を望む



空から見た船頭遺跡



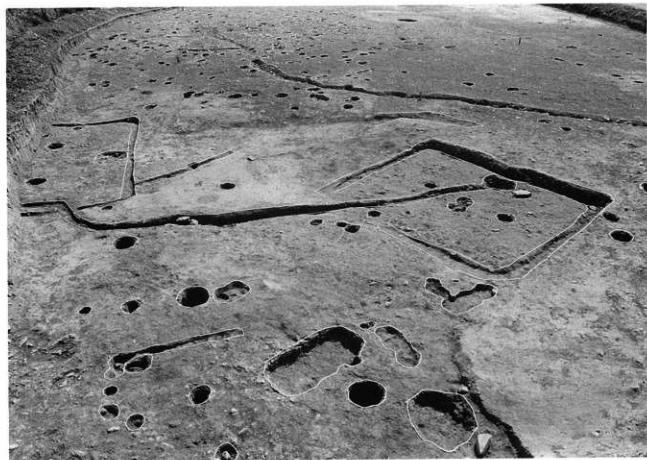
第IV地区全景



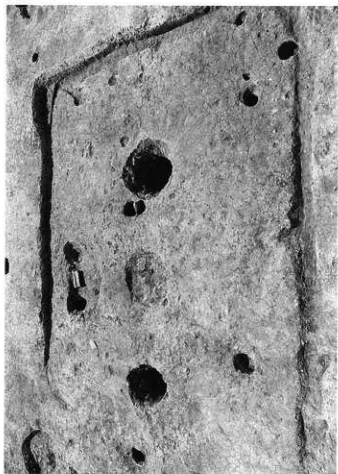
第V地区全景



SB27とその周辺



竪穴住居群



SB27 (北西から)



SB27屋内土坑



SB32 (北東から)



SB32土器出土状況



SB32屋内土坑



土器出土状況①



SB35 (東から)



SB35土器出土状況④



SB35土器出土状況③



SB35土器出土状況②

図版 6



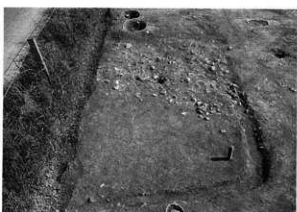
SB05 (北西から)



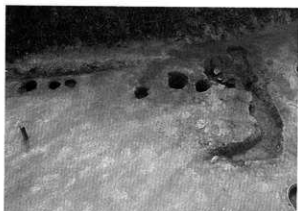
SB34 (南西から)



SB29 (北東から)



SB31 (北西から)



SB28 (北西から)



SB28屋内土坑



SB33 (南東から)



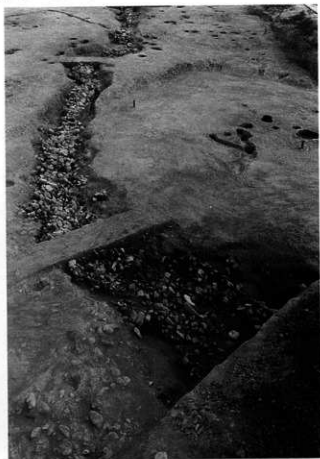
SB33屋内土坑



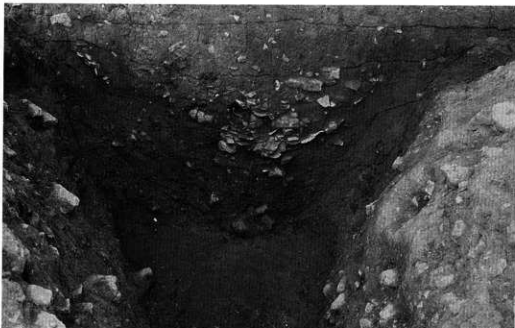
第V地区を南北に貫くSD24（北から）



SD24 土器出土状況①（南から）



SD24 土器出土状況②（北から）



SD24 土層断面
(F-F'セクション)



SD24土器出土状況③



SD24土器出土状況④



SD06に囲まれた掘立柱建物群（東から）



SD01に囲まれた掘立柱建物群（北西から）

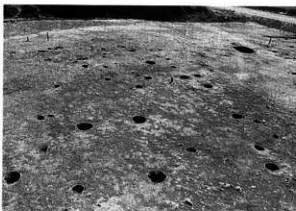
図版10



SD01 (東から)



SB63 (南西から)



SB41、SB40 (北西から)



SB56、SB55 (北東から)



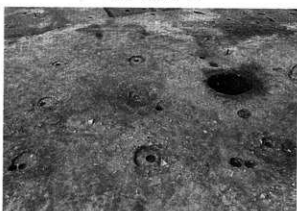
SB59 (北から)



SB49 (北東から)



SB69 (北から)



SB67 (南東から)



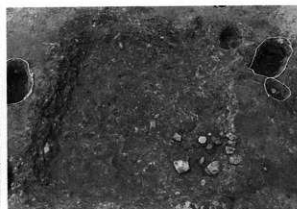
SP31遺物出土状況 (柱根)



SP32遺物出土状況 (鉢)



SP58遺物出土状況 (土師皿)



SK25 (北東から)



SK32 (南西から)



SK33 (南西から)



ST04 (北西から)

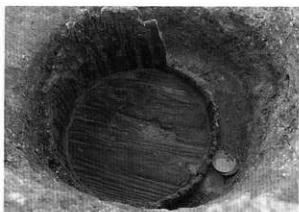


ST04 (蓋石除去)

図版12



ST01 (北東から)



ST01検出状況



ST01土器出土状況①



ST01土器出土状況②



ST03 (北西から)



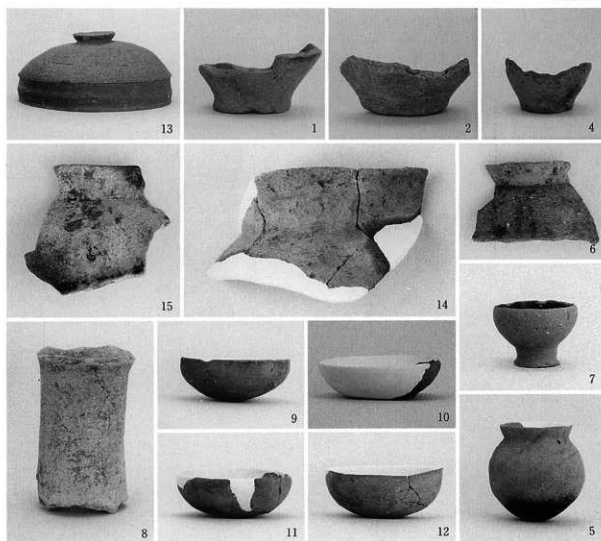
ST03土器出土状況



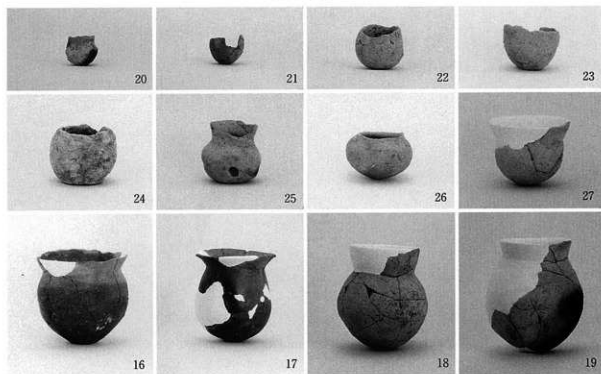
ST02 (北西から)



ST05 (東から)

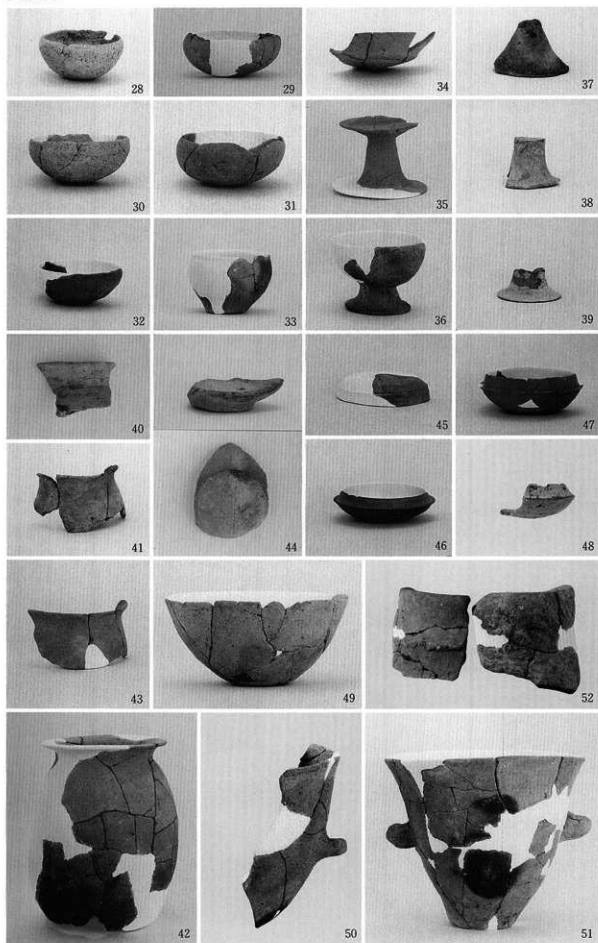


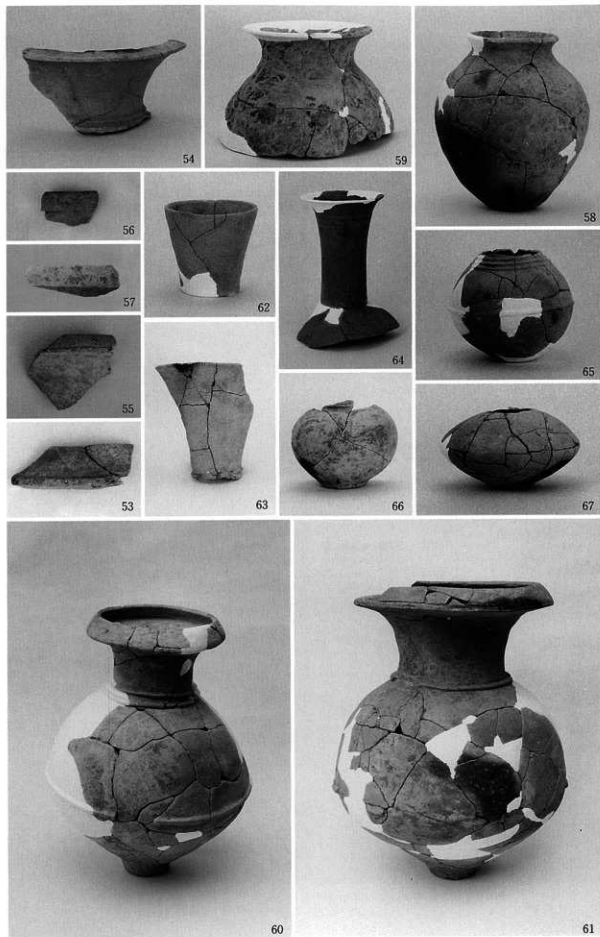
SB出土遺物

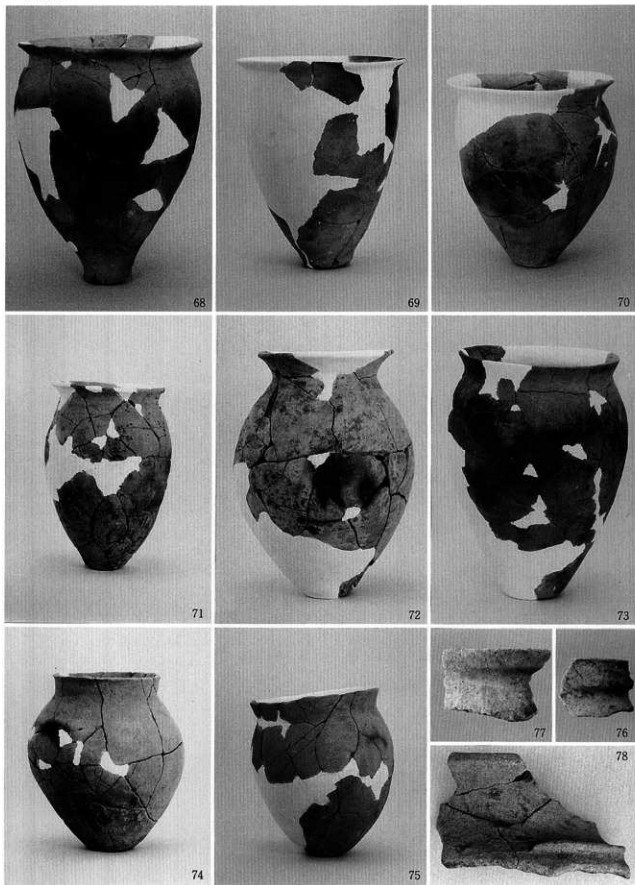


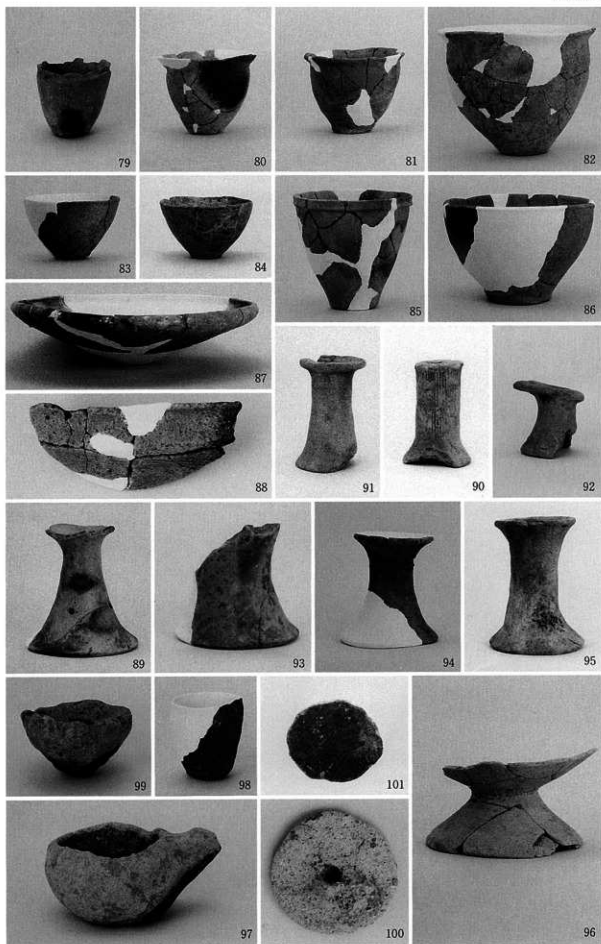
SB35出土遺物①

図版14



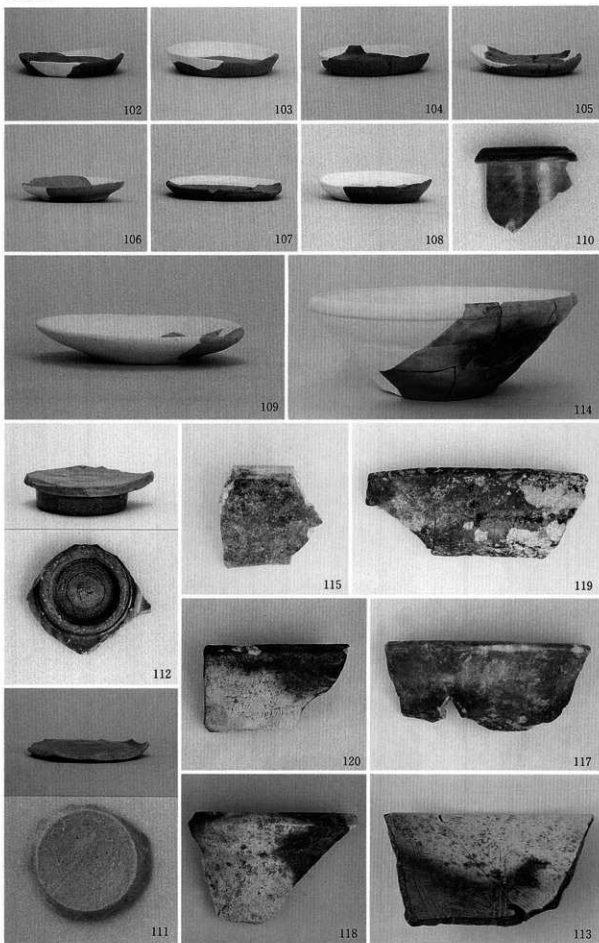


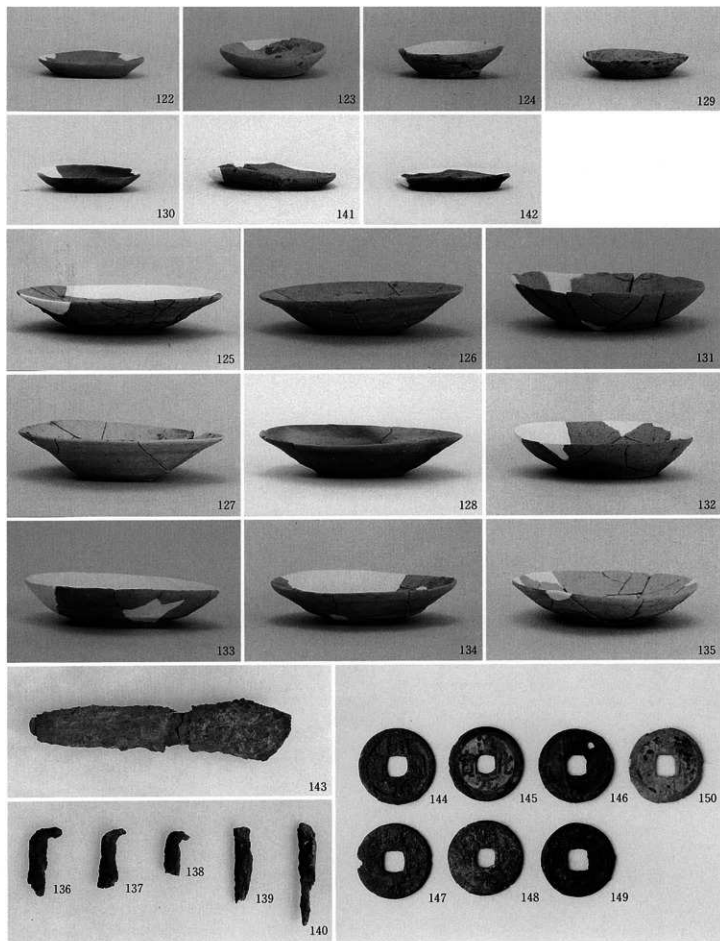




SD24出土遺物③

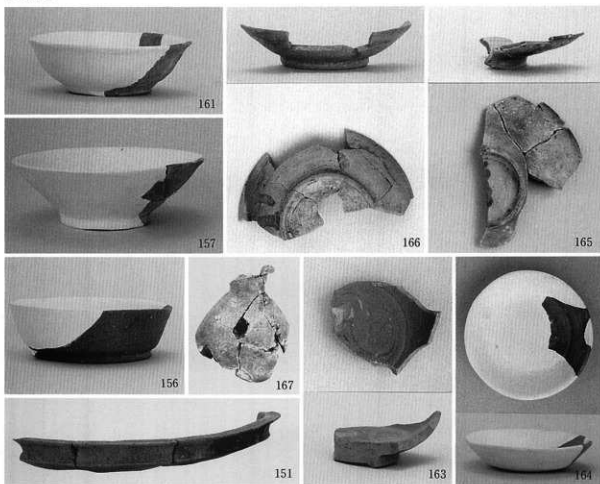
图版18



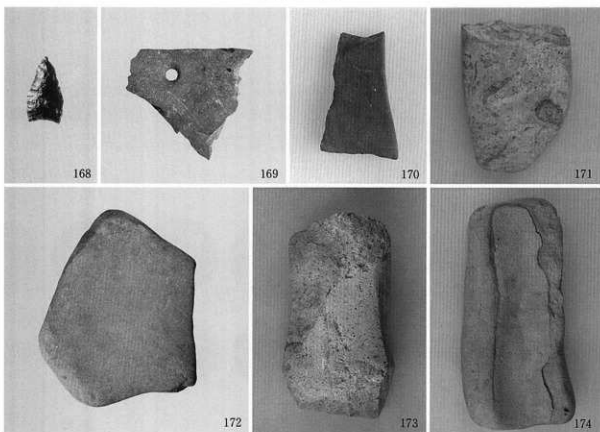


ST 出土遺物

図版20



包含層出土遺物



出土石器

S D24を掘り込む▶



▲SB56と作業員さん

▼現地説明会で解説する調査員



ST03木棺出現▶



▲平板測量をする▶



▲乾いた地面に潤いを



◀アイガモと調査員

報告書抄録

ふりがな	せんどういせき
書名	船頭遺跡Ⅱ
副書名	平成6年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第178集
編著者名	谷口哲一 山本義信 安村 優
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753 山口県山口市春日町 3-22 TEL 0839-23-1060
発行年月日	西暦1995年3月22日 (平成7年3月22日)

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″		m ²	
せんどういせき 船頭遺跡	とよつゆふとよつゆふとよつゆふ 豊浦郡豊浦町 おおきよしげおおきよしげ 大字吉永字船頭	35443		34° 7' 23"	130° 55' 47"	19940427 }	7,600 19941101	ほ場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
船頭遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 3軒 溝状遺構 1条	弥生土器、石器、土製品	弥生時代 ～室町時代に かけての集落
		古墳時代	竪穴住居跡 5軒 溝状遺構 1条	土師器、須恵器	
		古代	包含層	土師器、須恵器、緑釉陶器 灰釉陶器	
		室町時代	掘立柱建物跡30棟 柱穴 土坑 7基 溝・溝状遺構12条 墓 5基	土師質土器、瓦質土器 陶器、須恵質土器、青磁 鉄製品、銅銭	

山口県埋蔵文化財調査報告 第178集

船頭遺跡Ⅱ

—平成6年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

1995年3月

編 集 財団法人山口県教育財団
(山口市大手町2130)
山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3-22)

発 行 財団法人山口県教育財団
(山口市大手町2130)
山口県教育委員会
(山口市滝町1-1)

印 刷 隣報社写真印刷株式会社
